



一期一会 忘れ得ぬ時間③

忘れ得ぬ時間を与えて下さった一人に明治生まれの小林マツさんがいます。10号110号114号と3回、三ノ輪の語り部として記憶を語って頂きました。

「住所は北豊島郡三ノ輪上町286番7号」

明治44年(1911)生まれの小林マツさんは家族8人で新潟から上京して5歳で三ノ輪銀座Ⅱ新開地に来ました。この商店街は三ノ輪上町286番で1から10まで号を分けたのではないかと思います。当時の家賃は5円50銭でした。「東京でうまくいかなかったら帰っておいで」と親戚の叔母さんが母に5円を渡していたので、片道の運賃がその位だったのではと思います。母をそれを肌身離さずを持っておりました。父は、革屋に勤めに行き、母は、お惣菜屋さんからはじめ、次第にどじょうを扱い「小林どじょう」と呼ばれてました。どじょうは、棒秤の先にざるをつけて秤売りしてました。当時、三ノ輪の商店街の通りの裏のあちこち井戸がありました。どじょうの管理には水が大量にいるため、手押しポンプで汲み上げた水一斗(約18L)を天秤棒の両端につけたバケツに入れて路地をかき歩きして運んでました。遊んだことより家の手伝いをしていたことのほうが鮮明に記憶に残っています。

「瑞光尋常高等小学校の最初の卒業生です」

昼休みは1時間あり、昼食を食べに家に帰り、遠方の人たちはお弁当を持って来てました。尋常小3年か、4年位までは、昼で授業が終わったと思います。

男の先生は背広姿で女の先生は袴をはいていました。先生は、とても恐い存在で男の子の遊びのメンコをしていたのを、友達に先生に言いつけると言われてビクビクして学校に行った覚えがあります。男組と女組に分かれてましたが、入学当初からだったかは定かではありません。男の子は野球や肋木ろくぼくで遊び、小林さんは、ドッジボールで遊んだ記憶があります。生徒はほとんどが木綿の着物に下駄履きで4つ折した日本手拭いを下げ、白布の肩掛けかばんだったと思います。男子生徒は学帽をかぶり、女子生徒は髪を伸ばしてました。5年生の時に転校生の女子が洋服で来た時にはびっくりしましたね。下駄箱で、草履や運動靴に履き替えたと思います。雨の日は高下駄つまかけを履き爪掛つまかけをつけました。遠足もあり、上野動物園、川越の芋堀、江ノ島にいきました。修学旅行は1泊2日で日光に行き、枕投げをして怒られてから寝ましたね。

冬になると、一段高い教壇のすぐ前に2尺×2尺の木製の火鉢がありました。灰の中に炭が入っており、火鉢の下には引き出しに、早い者勝ちでお弁当を入れて暖めておりました。尋常小学校を卒業して別棟の高等科で2年勉強して、お作法と裁縫を習いました。高等科は、袴をはいていきました。ひだがあるのがお洒落で寝押しした記憶があります。

「三ノ輪では火事もつぶれた家もなかったね」

関東大震災が起きた時、マツさんは当時12歳。二



千住製絨所で働いていた長江カツエさん(左)と小林マツさん(右) 平成21年5月31日瑞光ひろば館にて

階建てばかりの5軒長屋の商店街の家同士が、傾いて屋根がくっついたと覚えているそうです。地震があった時間は始業式が終わって家におり、売る為にふかしたさつま芋を通行人に配ったそうです。余震が続く、翌日から数日間、大八車に荷物を乗せて、足立区本木の親戚に家族で疎開しました。

マツさんは、17歳から親から玩具店を任せられました。朝起きるとすぐに店を開け、三ノ輪座(映画館)が終わる午後11時まで人通りが絶えず、年中無休で仕事をしてきました。仕入れは、都電に乗って、蔵前まで行き、商品をふるしきに包んで背中に背負って帰ってきました。

東京大空襲時は鍋に入れた豆腐を流しに捨て頭に被って瑞光公園まで妹さんと逃げました。が、「死ぬ時は死ぬ。」と引き返して流しに捨てた豆腐を拾って味噌汁にしたと話されていた時、その腹のくくり方に驚きました。

マツさんは百歳を迎える数か月前に、自宅でトイレを済ませた後に亡くなりました。数時間前迄、外に歌声が聞こえていたそうです。さっぱりした性格で何でも興味を持ち、シルバーカーを押しながら散歩に出かけ信号待ちの時は、かかとの上げ下げをしていたマツさん、大好きな人でした。マツさんとの出会い、記憶を記録できたことは宝です。

500号を迎え、多くの方との出会いは、私の財産になりました。拙い文章をご愛読ありがとうございました。月一回、一期一会のご縁を大切に皆様に情報発信していきます。これからも宜しくお願い致します。